

すずき まさこ  
**鈴木 政子さん**

住宅用火災警報器設置推進会議（総務省所管）委員

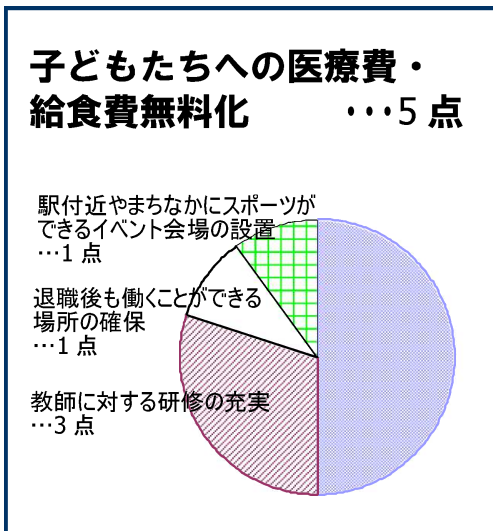
### ●防災に対する意識を高めたい

自主防災は地域活動を通じて盛んに行われているが、参加率や年代を見ると市民の皆さんの防災に対する意識が年々薄れてきているように感じる。『やらされている』『当番だから仕方なく』このような声を聞く事しばしば。防災はまずは自分の身や家族を守ることが先決、最近では減災といわれ、家具の固定や硝子に飛散防止フィルムを貼ったりして震災が起きた時に自分の身を少しでも守ることが出来ないかという活動が盛んになってきている。私の地区には毎年、浅間地区婦人防災クラブ・地元消防団・自治会を中心として行っている江西地区防災フェスティバルがある。防災講話を行ったり、音楽のイベントで町民に参集頂き、起震車体験やはしご車体験、スモークハウスでの煙体験など様々な内容で町民に防災を身近に感じてもらおうと活動している。また炊き出し訓練では 1000 食のカレーライスを無料で配布したりして地域全体での参加率向上と防災力向上を目指して活動を続けている。実際に震災が発生した場合この浜松市は陸の孤島となる可能性が高く、すぐに援助が来るとは限らない。せめて 1 週間分の食料を備蓄していただけよう声掛けを行っている。私自身、ガス爆発を身近で体験し災害の怖さを知っている。こうした経験を活かし地域における防災意識を高めたいと考えている。



### ●あいさつが飛び交う地域に

中学 2 年生向けに体験学習として仕事の間を提供している。子どもの経験として社会の実践の場を体感できることは極めて重要で、こうした取り組みを続けてほしい。最近、挨拶のできない子どもが多く、親でさえ挨拶できないことがある。教師に対する教育・研修も充実させてほしいが、教師だけでカバーできない部分は、地域のボランティアに協力してもらおうも必要。今後、自然と挨拶や会話ができる地域や人の絆が育ってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

### ●スポーツができる広場をまちなかに

まちなかが寂しい。静岡市は大道芸で活性化に成功しているが、浜松市もまちなかに人が集まる工夫がほしい。人が集まることで、お金も動き活性化に繋がる。具体的には、スポーツやイベントが開催できる広場、駐車場を整備したらどうか。

現代は、車社会が進展しているため、駐車場のある場所に人が集まっている印象が強い。お客さんは、近くで駐車場がないお店より、遠くても駐車場のある場所を選んでしまっている。このため身近な商店街もなくなってしまった。

すずき まゆみ  
鈴木 真弓さん

モダンアート協会会員、浜松美術協会会員



「鈴木真弓さん」  
造形作家として活躍。写真は、ご自身の作品「時の重なり」をバックに撮影したもの。

●「宝物」があふれているのに・・・

旅行に行った時、「浜松のように良いところから何で来たのか」と聞かれたことがある。また、他の観光地に行くと、「浜松にも似たような景色があるな」と思うことがよくある。浜松には旅行のツアーも十分に組めるだけの資源はあるが、観光に頼らなくても生活できる環境にあるため、危機感が薄く、このような「宝物」を活かしきれていない。住民が真剣に観光に取り組んでいる地域では、市民一人ひとりが観光客を意識して、周辺をきれいにするなど出来ることから始めている。

●どんな仕事でも尊重できる市民に

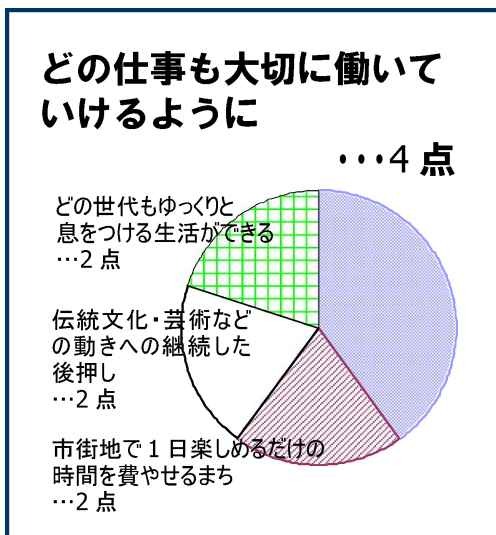
職業によって、あるいは、同じ会社の中でも業務内容によってランク付けされたりする現実がある。懸命に働いているのに職種だけを見て、「あのようになるな」と子どもに言ったりする親もいる。逆に、お金を稼ぐ人のことを悪く言う人もいる。どのような仕事にも価値があり、一生懸命働いてお金を得ることを恥じることはない。どのような仕事でも尊重できる市民になってほしい。

●芸術や伝統文化には継続した後押しを

芸術の観点からすると、市内には作品展示する場所が少ない。特に造形作家としてはインスタレーションができる場所がない。

また、イベントの助成金は年度ごとの設定で、次年度への準備資金に使えないことが残念だ。イベントを継続できるような仕組みにしてほしい。

●「息をつける生活」ができるように



【浜松市への期待度グラフ】

子育てする母親の中には、話し相手や相談相手がないなどの孤立した状況におかれ、息をつけない生活を送っている人がいる。また、一つの見解に過ぎないネット上の情報をまじめに完璧にこなそうとする人がいる。子育てに真剣に向き合っているからではあるが、頑張りすぎている気がする。「やらなければならない」という重圧にさらされているのではないかと感じる。

各々が無理をすることなく、できる範囲のことをすれば十分だと感じ、かつ、周りからのサポートも受けられるような「息をつける生活」を送れる社会になってほしい。

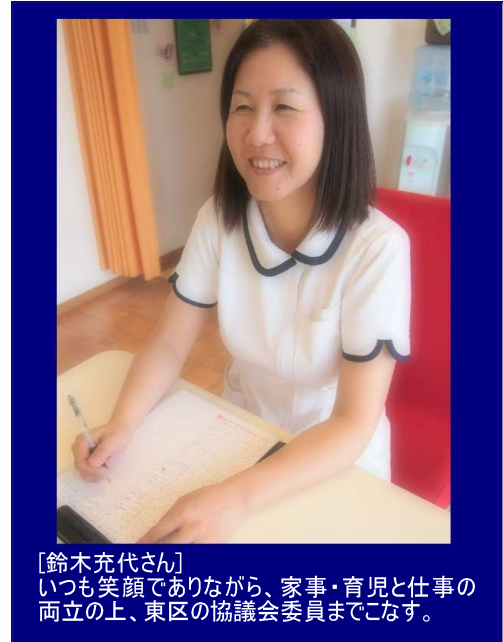
すずき みつよ  
**鈴木 充代さん**

東区協議会委員

## ●市民が暮らしやすいまちづくりを

浜松市は東京・大阪間の中間地点で、東名・新東名高速道路も走っており、物流の拠点になるなど、産業が発展する優位性がある。しかし、市民生活の観点から見ると、市内の交通ネットワークが未発達のため、車がないと生活に不便を来す。超高齢社会に向け、移動手段を「車」から「公共交通」に切り替える必要がある。トラムの導入などを検討していったらどうか。

また、浜松の医療施設は充実している。今後の人口減少時代の突入により社会保障への不安はあるが、今の医療レベルは維持してもらいたい。



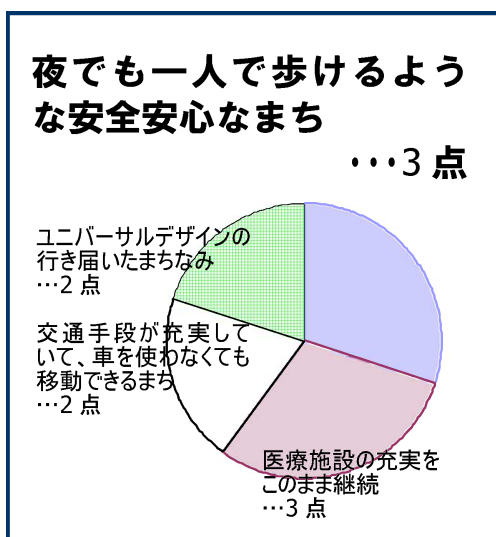
[鈴木充代さん]  
いつも笑顔でありながら、家事・育児と仕事の両立の上、東区の協議会委員までこなす。

## ●みんなが知り合いになれば犯罪もいざこざも減る

高齢化、少子化が進んでいく中では、人と人が助け合っていく必要がある。以前は当たり前にあった「地域コミュニティ」を改めて構築していかななくてはならない。そのためには、子どもに対する心身・心の健全育成を手厚くし、人との関わりを増やす教育が必要。結果、次世代の受け皿づくりにもつながる。「夢」であるが、みんなが知り合いになれば、犯罪もいざこざも減るはず。

## ●市役所職員は地域の「班長さん」

市役所の仕事は、サービス業、接客業である。職員はこうした自覚を持つとともに、地域の「班長さん」のような、身近に感じられる存在であってほしい。一方で、市民は何でも行政に頼るのではなく、自分たちでできることは自分たちでしていく姿勢が必要だ。お互いの距離感が少しでも近づけば、何事も双方が歩み寄り、「我が事」として課題解決に向き合える。



【浜松市への期待度グラフ】

## ●未来に向けて今からできる防災対策を

近い将来必ず大規模地震が来るという前提のもと、今できる対策をしなければならない。

個人として、地域として、市として、危機感を持って具体的に必要な設備、食料品の備蓄等、防災用品の充足や地域を挙げての訓練などを行っていく必要がある。例えば HUG 訓練（避難所運営訓練）を行うと、トイレが使えない状況になったらどうするか、あるいは、いろいろな立場、状況下の人が避難所に集まってきた時にどう対処するかなどを体験的に学ぶことができる。自らが体験することで、真剣に考えるきっかけとなるとともに、いろいろな立場に立った考え方ができるようになる。今から訓練の積み重ねが必要だ。

# 鈴木 基生さん

田町パークビル株式会社 代表取締役

## ●浜松は創造性豊かなモノづくりのまち

浜松は、挑戦的なモノづくりを行うだけではない。販路創造力を兼ね備えた職人がいる。繊維産業では、自らヨーロッパのアパレルメーカーやデザイナーに売り込んで直接取り引きをしている人がいるし、楽器産業でも、他にはないマウスピース製作の技術をもって独立している人もいる。アパレル店のオーナーから聞いた話だが、ヨーロッパでは、浜松のコットン生地は「日本のコットン」ではなく、「浜松のコットン」と言われているようだ。これは、浜松市でバイク、楽器、テキスタイルなど嗜好に富んだ商品が製造されており、海外では極めて創造性豊かな街として受け取られているからである。



【ゆりの木通りの万年橋パークビルの皆さん  
(左端が鈴木基生さん)  
万年橋パークビルでは、8階をフリースペースとして貸し出しており、アート展示、アートパフォーマンスなどのさまざまなイベントが催されている。

## ●まち全体の活性化を考える若者が報われるように

現在、20～30歳代の若者が、自身の得意分野を活かして中心市街地のまちづくり活動をしている。こうした若者は、まち全体の活性化を考えて行動しているが、彼らの活動は、直接“お金”には結びつきにくい。「まちの価値が上がる」という成果が評価しづらいためでもある。活動している本人も何らかの方法を考えるべきであるが、行政として何らかの仕組みがないか考えてほしい。

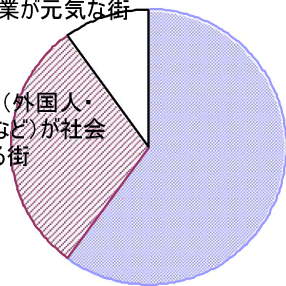
## ●潜在的な魅力を顕在化するために

平成 17 年、ゆりの木通りで仕事を始めた当初は、商店街に魅力を感じなかったが、個々の店の中に入って店主と話すと、それぞれが専門知識に富み、こだわりを持って仕事をしていることに気付いた。これらの店は、チェーン店のように効率的ではないが、「人生を果のあるもの

マクロ的に見れば経済が縮小しているのに、妙に熱中するものを持っている人の多いまち…6点

農林水産業が元気の街  
…1点

マイノリティ(外国人・障がい者など)が社会参加できる街  
…3点



【浜松市への期待度グラフ】

にできる」可能性に満ちている。ただ、潜在的な魅力を顕在化する努力をあまりしていないし、自らがやりたいことを上手く表現できていない。店主が自ら考えて行動することが重要だが、私も商店街の中で、何らかのきっかけづくりをしたいと考えている。

また、まちなかのマンションの入居希望者には、退職後に浜松に戻ってくる人が多い。まちなかに住んでいるが、引きこもっているような高齢者もいる。今後、このような人たちが、「何となく」集まれる場所をつくったり、学生の協力のもと、まちなかガイドツアーを行ったりしていきたい。若者が昔からある店に興味を持ち、まちなかに住む高齢者は店先で昔話をする。お客さんも店主も楽しいまちを目指していきたい。

すずき やすみつ  
**鈴木 靖充さん**

防犯設備士

NPO 法人しずおか包括ケアネット e-ライフ支援 所属

国境なき肉団 団長



【鈴木靖充さん】  
 異業種交流を積極的に行い、横のつながりを深め見識を広げている。

●**浜松市の市民性は“ひかえめ”！？**

同世代の異業種交流を積極的に行っているが、静岡市と比べた浜松市の事業者の傾向としては、代替わりが進んでいない感がある。若い世代が上の世代に遠慮していると感じる時がある。

また、個々に活動する人は多くいるものの、積極的に横のつながりを持つとすると人は少ない。もっと連携していけばさらに効果が上がるのに、と感じることがある。

●**地元の事業者が盛り上がれば、街中も郊外も発展する！**

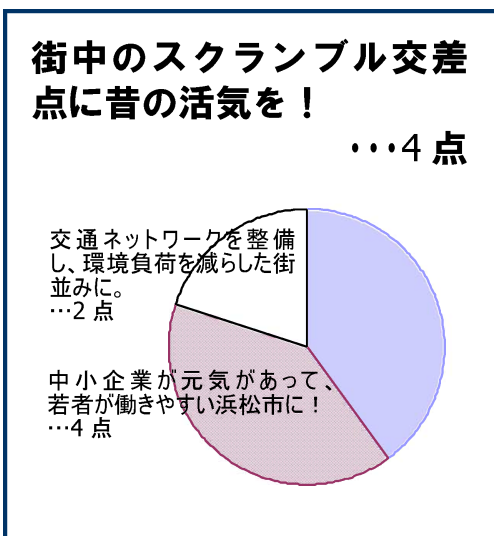
地元の中小企業が元気な街になってほしい。今後若者が減る中で、ニートが増えてしまっただけでは困る。地元の中小企業が元気で、若者が働く環境を提供できれば、浜松はもっと良くなる。そのためには行政の支援も必要だろう。これは街中も郊外も同じことが言える。

昔の街中のスクランブル交差点は今の 10 倍の人の流れがあったという記事を見たことがある。我々が子どもの頃は、「街中に行く」ということは特別でわくわくドキドキしたものだ。ぜひそういう街中になってほしいし、ぜひスクランブル交差点の人の流れが復活することを望む。

●**次の世代を育てる視点を。**

地域の防犯力を高め、子どもが自由に外で遊べるような、安心・安全なまちづくりを望む。子どもの自由を保障することは、豊かな心を育む一助となると考える。

また、静岡市のとある小学校は、メルボルンの小学校とスカイプをつないでお互い自国語で交流をするという取り組みをしている。そして児童はその授業での「学び」をすごく楽しんでいるという。「学ぶことが楽しい」という教育は、前向き・積極的な社会人を育て、結果、地域に還元されるものであり、心を育てる教育に力を入れていくべきである。



【浜松市への期待度グラフ】

●**「指導者」としての高齢者に期待。**

高齢者には、これまで長年培ってきた知識や技術を次の世代に伝達する役割をぜひ担っていただきたい。それが高齢者個人の主体的なシニアライフであるとともに、「超高齢社会」における、地域の発展につながると思う。

# 聖隷クリストファー大学のみなさん

(1 頁目)

聖隷クリストファー大学社会福祉学部社会福祉学科 4 年生

## ●音楽のまち！自然も豊か！

- 音楽のまち。世界的な企業もあり、世界的なコンクールも実施している。
- 自然が身近であり、中田島砂丘や浜名湖がすぐ近くにある。
- 車があれば、交通アクセスが良い。またどこに行っても、ヒトが多すぎない。
- ボランティアをするにも、様々な団体が募集をされていて探しやすい。
- 浜松まつりに代表されるように、地域の絆がある。

## ●まちなかに魅力を感じない・・・

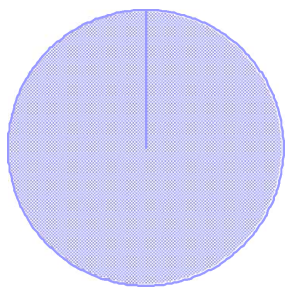
- 同じ世代同士で、遊ぶ場所が少ないように感じる。買い物でも、郊外の大型商業施設みたい買い物に行く場所が決まってしまう。
- 中心市街地が今後どうなっていくのかが不安。
- 駐車場がないところは遊びに行かない。具体的に、映画を 1 本観に行くにしろ、駐車場有料の百貨店などではなく、少し遠いが郊外の映画館付き大型商業施設に行くことが多い。
- 買い物で、駅前の品揃えに満足しない。また、服でも新商品の流通が遅い気がする。
- 実際、買い物をするなら大型商業施設や県外。
- 浜松駅前にはまちなかとは思わない。
- 飲んでも、夜遅くまで運行しているバスが少ないので、早く帰らないといけない。



左手前から 一番奥 右手前から  
[豊田穂菜美さん][大場義貴先生][増田直晃さん]  
[高橋依里子さん] [山本隆弘さん]  
[三浦愛実砂さん] [本目早知子さん]

社会福祉士や精神保健福祉士の資格取得のために日々勉強中。勉強や就職活動の傍ら、アニマルセラピーのボランティアに従事している学生も。

障がい者、高齢者などすべての市民が安心して暮らすことのできるまち …10 点



【浜松市への期待度グラフ】

## ●現在の専門課程を学んでの所感

- 困難な事情を抱えている人たちがもっと政策決定のできる場、議論ができる場など、意見が言える場が必要なのではないか。
- 外出が困難な障がい者や高齢者向けの宅配サービスが、安価でもっと使い勝手の良いものになってほしい。ネットスーパーも徐々に普及しているが、実際商品を見て買い物をしたい人もおり、宅配サービスとネットスーパーはメリット・デメリットがある。
- 障がい者などが人とのつながりが保てるような、仕組みを充実してほしい。ささいなことで、すぐに孤立してしまう可能性がある。

# 聖隷クリストファー大学のみなさん

(2 頁目)

聖隷クリストファー大学社会福祉学部社会福祉学科 4 年生

## ●実習を経験して・・・

- 社会のイメージが変わった。
- 障がいを持っている人は、何かしらの壁があると思  
ったが、そのようなイメージはなくなった。自分た  
ちと同じだと痛感した。
- 膨大なケース記録を作成するのが、本当に大変だっ  
た。
- 社会に出る前に、現場に出てより一層、精神分野で  
働きたい気持ちが強くなった。



左手前から 一番奥 右手前から  
[鈴木郁恵さん] [大場義貴先生] [白崎菜奈さん]  
[古川春子さん] [柴田隆さん]  
[漆家友輝さん] [宮崎祐太郎さん]

大学 4 年生であるため、やはり就職活動が忙しいと  
のこと。中には就職活動が終わった学生さんは、人  
生を謳歌中…だそうです。なお、市の障害保健福  
祉課や精神保健福祉センターで実習された学生さ  
んもいました。

## ●浜松人はドライな感じ？

- 生まれも育ちも浜松市だが、ドライな人が多い  
気がする。サバサバしている？
- 東京などから友達が来ても、紹介する場所がない。しかし、自然を見せると感動する。
- 外国人が多い。ブラジル人学校もあるので、やはり身をもって感じる。
- 伝承されている文化財が、有形無形限らずたくさん存在している。文化財を活かすことによ  
って、観光資源になり得る。
- マンションよりも一戸建てを持つ人が多いイメージがある。

## ●市役所に言いたいこと

- 市役所に行ったときに、クレームを言っている人にドライに対応していて冷たいと感じた。
- 実際たらい廻しにされた・・・。
- 今も昔も、市役所が何をしているのかが見えない。
- 障害保健福祉課と精神保健福祉センターへ実習に行き、様々な現場に同行したが、ケース対  
応を丁寧にしていて、良いイメージしかない。

## ●自分たち、このまちの 30 年後は・・・

- いきなり 30 年後は考えられないが、10 年後は結婚していきたい！
- 子育てをするのは、浜松市が良い！
- 子どもが生まれるとバスが乗りにくいので心配だ。
- 今、精神領域では患者が急増しているが、今後様々な治療やサービスが行き届き、自分たち  
がいずれ必要となくなる社会が理想である。
- 障がい者などに対する差別や偏見がないまち。正しい理解が進んでほしい。
- 精神領域は、専門職が主導。しかし、家族や地域が参画し、みんなで支え合うまちになって  
ほしい。

## ●まちづくりの基本は『安全・安心』

将来の浜松市内の人口分布を正確にとらえ、災害対策や社会資本整備も「選択と集中」が必要である。

居住エリアはコンパクトシティを目指し、自家用車を使わない生活圏を確保することにより、二酸化炭素排出量を削減する低炭素化社会の環境を整備する。また、集住による余剰地では太陽光発電など再生可能エネルギーを創出する IT 技術を活用したスマートシティの取り組みも重要である。

二酸化炭素排出量の増加等は、地球温暖化をもたらし、その結果、海面上昇やゲリラ豪雨など大雨の頻発による洪水、土砂災害、高潮などのリスクが高まる。

## ●ハザードマップを正しく理解

津波や洪水などのハザードマップは、前提となる様々な条件を設定して作成される。

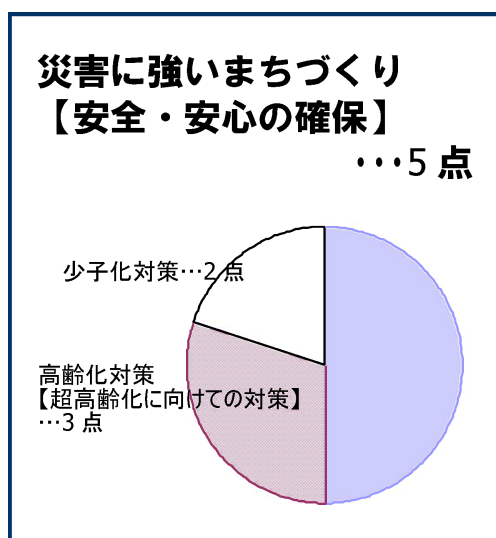
ハザードマップが出ると圏外の人たちが安心だと勘違いしてしまう。シミュレーションは条件によって変わるということをしっかりと市民に知らせる必要がある。

東日本大震災では、ハザードマップのすぐ外側で多くの方が亡くなっている地区もあるので、ハザードマップを絶対視する姿勢は良くない。

## ●防災教育は「繰り返し」がミソ

地形条件などにより、津波、洪水、土砂崩れなど各地域における災害特性は異なる。

地域ごとに様々な条件の災害シミュレーションを行い、時々刻々変化する状況をアニメーションによりわかりやすく表現することは、言葉で説明するよりも記憶に残るため、市民への浸透には有効な手段である。それを繰り返し行うことが防災教育には必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

No image

[瀬尾直樹さん]  
まちづくりにおいては、命を守ることが第一と語る。

## ●まちなかにワクワク感を

浜松のまちなかは活気がない。

もっとまちなかに行きたくくなるようなワクワク感が欲しい。そのためには、規制緩和等により、若者が楽しめる、活気のあるまちづくりが大切である。

また、観光客には、『もてなしの心』を前面に打出し、リピーターとして来てくれるまちづくりを創造することが重要である。



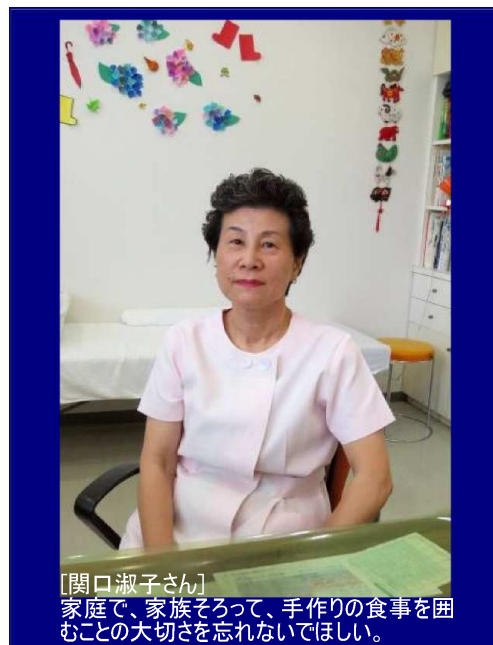
せきぐち よしこ  
**関口 淑子さん**

コスモスこどもクリニック院長

### ●家庭で自分の手で子育てが出来る環境整備を

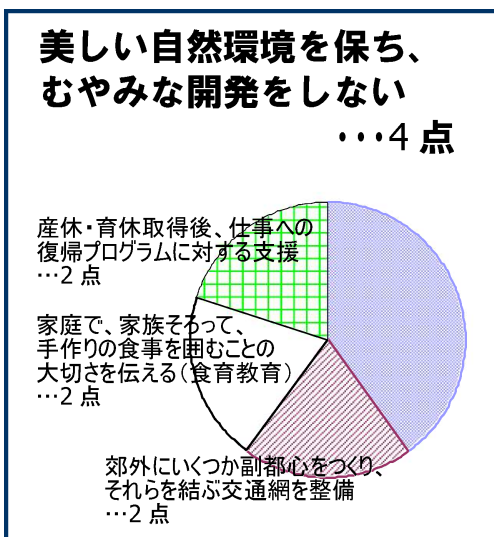
昭和 63 年 2 月に浜北で「コスモスこどもクリニック」を開業。平成 20 年 2 月からは、子どもを持つ親のニーズに対応するため、日曜診療を始めた。日曜日に来る患者の約 90%は保育園児で、平日は親が忙しく、子どもの体調管理まで手がまわらず、重篤になって来るケースもある。

診察していて感じることは、子どもを保育園に預けて、働きたい（仕事に復帰したい）女性が多いということ。しかし、入園すると、幼い子どもは次々に感染症に罹り、身体は「免疫の嵐」に投げ込まれたような状態になる。あかちゃんの体が悲鳴を上げているのが聞こえるようだ。時代の流れもあり、生活のために忙しく仕事をしていると思うが、せめて子どもが 3 歳になるまでは、家庭でゆっくり育ててほしい。仕事への復帰はその後でよいと思う。



### ●働きやすい職場を目指して

私自身、仕事をしながら 2 人の子どもを育ててきたが、毎日が綱渡りのような生活だった。こうした経験を踏まえ、当院の正社員の勤務は、開業当初から、週休 2 日半、週 32 時間労働で今まで運営してきている。全体業務量に必要な人数より 1 人多く雇用する必要があり、雇用主として、給与や社会保険料などの負担は生じるが、「そのおかげで、母親として子どもに十分なことができた」と子育てを終えた従業員は感じていると思う。当医院と同じような取り組みをする企業が増えてくれば、女性も男性ももっと働きやすい社会になるだろう。



【浜松市への期待度グラフ】

### ●女性が多様な形で参加できる社会に

女性の社会参加は、自分が納得できる形で参加する、多様な形があってよいのではないかと。

「1 歳から保育園に入れて、早く職場復帰をしたい。保育園をもっと増設してほしい。」といったマスコミの論調に踊らされてはならない。親の余裕のなさは、一番弱い子どもにしわ寄せがくる。30 年後という長い目で見て、行政には、「保育所をたくさん整備して、待機児童を無くす」のではなく、「子どもが 3 歳になるまでは、家庭で自らの手で育てられるような支援」や、企業等で「社員が育休から職場復帰するプログラム整備の支援」をお願いしたい。

## 曾根 晃一さん

社会福祉法人聖隷福祉事業団

聖隷コミュニティケアセンター所長

### ●利用者一人ひとりに最適なサービスを

当事業所は、在宅要介護者を地域で支えることを目的に 1990 年に開設し、福祉用具の販売及びレンタルを行っている。

超高齢社会において、介護ニーズはますます高まっている。行政、医療、介護保険事業所などと連携し、利用者一人ひとりに適したサービスの提供を心掛けている。

福祉用具を利用することで、お客様の生活が楽に、スムーズになり、感謝されたときは仕事のやりがいを実感する。



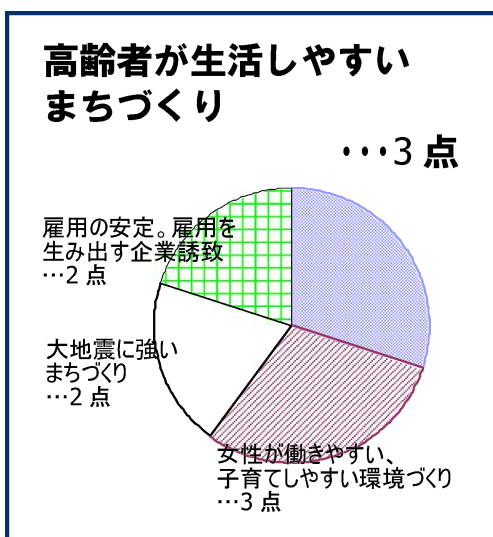
曾根晃一さん

焼津市から毎日車で通勤。浜松市は天竜川、浜名湖、中山間地域など自然に恵まれ、過ごしやすい。また、浜松まつりなどを通じ、地域のつながり、結びつきが強いと感じる。

### ●若い世代に医療、介護 を身近に感じてもらう

超高齢社会を迎え、医療、介護分野の必要性が高まることは必至である。それらを支える人材の確保は現在も難しいが、30年後は更に生産年齢人口が減少し、より人材確保が困難となる。また、核家族化が進み、おじいちゃんおばあちゃんと同居する世帯が減り、医療、介護の必要性に関する実感がなかなかわからない場合もある。今からでも、30年後を支える若い世代に、医療、介護をより身近に感じてもらい、その必要性や魅力を伝え、将来の仕事として選んでもらえるような取り組みが必要である。

例えば、介護保険施設でのボランティア活動や医療、介護分野で働く人を講師とした授業、車椅子を施設や屋外で実際に使って、福祉用具の使用感やまちづくりのユニバーサルデザインの必要性を実体験する活動など、子どもたちの率直な感想、柔軟な発想が医療現場、介護現場でも生きるのではないかな。



【浜松市への期待度グラフ】

### ●だれかが近くにいてくれる安心感が必要

働き手を確保するためにも、女性が働きやすい環境づくりは今後さらに重要になってくる。当事業団も産休・育休を取得しやすい環境づくりに取り組んでいるが、幼稚園や保育園の整備も更に必要だろう。

また、高齢者がいつまでも元気で、活気ある生活が送れ、その力を活かせる社会になってほしい。そのためには、地域のつながりがより重要になってくる。高齢者の一人暮らし世帯が増加する中、他者との交流や趣味活動などができる場所を確保し、提供していく。だれかが近くにいてくれる、という安心感が大切である。